豚は他の家畜に比べて，体脂肪の蓄積力が大変大きい，このため汗腺は退化しており，体の表面から汗を出すことができない。このため皮下脂肪の厚くなった成豚は暑さに弱く，管理の不注意から，しばしば熱射病に冒され死亡することがある。
一方，子豚は成豚と違い，皮下脂肪は薄く，そのうえ体温調節機能が劣っており，寒冷によって凍死することがある。このように豚は年齢によって生理的に相反する特徴を持っている。
豚の管理は，各々の特徴をよく理解し管理することが大切である。しかし，最近の豚舎構造をみると，外観的には極めて立派な豚舎でも，その大部分は，人間を中心とした構造（省力管理を中心とした構造）のもので，豚の生理生態を考慮したものは極めて少ない。
このため，このような豚舎に押し込められている豚は，呼吸による炭酸ガス，体温の放散，糞尿，発酵によって発生するアンモニアなどが絶えず眼や鼻，気管の粘膜を冒し，また体温調節機能に障害を与え，あるいは消化器の障害を引き起こす。この傾向は，暑熱，厳寒の時期に一層多く発生している。以下，水害，雨害を含め，これらの対策について述べる。

1　水害，雨害の対策

雨が連続して降り続くと，豚舎の中，運動場などの湿度が高くなる。特に6月-7月の梅雨期では蚊やハエも発生しやすくり，田植えなどと重なった場合，しばしば豚の管理が疎かになる。
高温多湿期は，病原菌や寄生虫が最も増殖しやすい環境になる。この時期の管理に手ぬかりがあると，体調を崩した豚などは各種細菌に感染しやすくなり，病豚が続出し思わぬ損害を被ることになる。

（1）水害の一般的な対策

ア　豚を安全に守るため，避難場所や避難方法を考えておくこと。
イ　不幸にして斃死した場合には，最寄りの家畜保健衛生所の指示を受けて処理をする。河川等には絶対捨ててはならない。
ウ　伝染病の疑いのある場合は速やかに最寄りの家畜保健衛生所に連絡すること。
エ　豚舎の倒壊，瓦，トタンの破損等を防ぐための補強工事をしておく。

（2）水害を受けた場合の事後対策

水害後，最も心配されることは，伝染病の発生である。災害後の衛生対策としては
ア　豚の飼養環境を衛生的に改善整備することによって健康の維持に努力する。
イ　最善の方法を尽して病原体の侵入を防止する。特に消毒の実施。
ウ　速やかに予防接種を受け，動物医薬品を適正に使用して病気の発生を予防する。
エ　感染によって起こる病気の知識と対策を経営者自らが身につけ予防対策を的確に実施する。疾病の早期発見と早期治療を発生初期の予防対策を的確に実施する。
オ　伝染病の疑いのある病気が発生した場合は，速やかに最寄りの獣医師，又は家畜保健衛生所に届け出て，適切な指導を受けること。

（3）適正な消毒の順序と使用消毒薬

水害発生後は，何をさておいて消毒の実施が第1である。畜舎の消毒にはクレゾール，クロールクレゾール製剤，オルソ剤，サラシ粉，アルカリ製剤のいずれでもよい。豚舎内の洗浄が十分であれば逆性石鹸，両性石鹸を使用してもよい。

消毒の順序は，
ア　消毒薬を軽く噴霧して塵埃を抑える。これは塵埃による微生物の飛散を防ぐのに効果がある。

イ　豚舎内で移動し得る器具は屋外に搬出する。わら，糞便などが多量にあるときは焼却等を行う。

ウ　床，腰壁および器具などに汚物が固着しているときは，アルカリ製剤や洗濯ソーダで洗浄する。アルカリで損傷をきたす恐れのあるときは中性洗剤を使用する。なお，アルカリ洗浄の場合は，あとで水洗してアルカリを除去する必要がある。

エ　最後に床，腰壁，天井，器具などに消毒薬を散布する。消毒薬の効力は温度が10℃上昇するごとに消毒力は2-3倍増強するので，寒い時期では50-60℃に温めて使用するとよい。

オ　運動場等の消毒，薬剤による消毒は不可能である。さらし粉や，生石灰を3.3㎡当たり約1kg程度散布してから表土を20-30cm以上取り除いた後，さらに上記薬剤を散布し，新しい土と交換することが理想的である。しかし現実的には困難なため，生石灰を散布し表土を天地返し，その上に薬剤散布し，しばらくの間使用を中止するのがよい。

（4）降雨害対策

ア　子豚の管理

長雨は子豚の下痢発生の引き金ともなる。一度感染するとその症状は重く，斃死率も高い。床面の清掃，乾燥に努め，日常の観察を怠ってはならない。また長雨が続くと気温も下がり，薄ら寒い日が多いので，保温（特に分娩後7日齢以内の子豚）には十分留意する必要がある。

イ　肥育豚の管理

密飼いを避けて，豚舎内の湿度の低下に努めるとともに，できるだけ開放して舎内の通気をよくし，乾燥を促す。

ウ　繁殖豚の管理

特に梅雨期は，降れば湿熱，照れば蒸熱という繁殖豚にとっては最も過ごしにくい時期である。舎内の換気を図り乾燥に勤めることが先決である。分娩柵内に入っている豚は，排泄した糞尿で乳房が汚染されると乳房炎を誘発したり，子豚の下痢発生の原因にもなるので柵内の洗浄は入念にしなければならない。

エ　汚水処理施設の管理

汚水処理のため，浄化槽を設置しているところでは，雨水が流入しないようにして放流する工夫がある。

オ　飼料の管理

飼料は変敗しやすいので，1回の購入量は半月分程度として，大量の在庫を避けるとともに，十分に乾燥状態を保てるようにして保存する。不注意で発酵，変質した場合は与えない。

カ　その他の管理

蚊やハエの発生を防ぐこと，特に蚊は日本脳炎の媒体として恐れられている。豚舎や，住宅付近の溜まり水，その他ボウフラの発生しやすい場所の消毒は厳重に行うこと。